



—湾岸地域ニュース—

湾岸アラブ諸国：イラン大統領選挙結果に対する各国反応

(6月19日現在)

研究員 河井 明夫

イラン大統領選挙でアフマディネジャード現職大統領の再選が発表された13日以降、ペルシャ湾をはさんだ対岸の湾岸アラブ諸国（GCC加盟6カ国）では、公式・非公式のレベルで国ごとに対照的な反応が見られる。

<公式レベル>

先ず公式の反応を見た場合、13日にカタール、14日にUAE、15日にバハレーン、クウェイト、オマーン各国の元首がそれぞれ、「再選」したアフマディネジャード大統領に祝電を送っている。

しかし、6月19日現在、サウジ指導部がアフマディネジャードに祝電を送ったという報道は見当たらない。因みに今年2月11日のイラン革命記念日には、アブドッラー国王はアフマディネジャード大統領宛てに祝電を送っている。また2005年の前回のイラン大統領選挙でも、当選者が決まった翌日に、サウジ指導部はアフマディネジャード新大統領に祝電を送っており、今回の対応との違いが際立っている。

<サウジ、クウェイト、UAE 各国メディア、選挙結果を批判>

サウジ国内メディアは、国際情勢に関しては政府の公式見解におおよそ沿った社説・論説を掲載することが原則となっていることから、14日以降のサウジ主要紙の社説で、アフマディネジャードの再選とそれを巡るイランの騒動を直接扱っているものは、他の湾岸アラブ諸国の各紙に比べて少ない。

サウジ紙の中で「リベラル」と目されるワタン紙は、先ず17日に常連のコラムニスト、ゲイナーン・ガメディーの筆により「票の改ざんとデモ行動は病の症例」と題するコラムを掲載したのに続き、翌18日には「イランの危機は信頼性の危機」と題する社説で、アフマディネジャードの再選に抗議する「改革派」の期待を支持する論陣を張った。

また逆に最も政府寄り（保守的）と言われるリヤード紙は、報道規制一般に対する批判をテーマとする社説の中の一節で現在のイラン情勢を扱い、抗議デモの様子が海外に伝わるのを妨げようとするイラン当局の努力を時代遅れで無意味だとあざ笑っているが、イラン大統領選挙とその後の騒動そのものを直接扱った社説やコラムは同紙紙上では今

のところ見当たらない。

アラブ各国の読者向けにロンドンで発行されているサウジ資本のアッシュアルクルアウサト紙やハヤート紙は 14 日付の号から連日、湾岸地域以外のアラブ諸国出身と思われるコラムニストを中心に入れ替わり立ち代り、イラン大統領選挙の結果を批判するコラムを数多く掲載している。

また、それぞれの元首によるアフマディネジャード大統領への祝辞にも拘らずクウェイトや UAE 各紙の論調もサウジ各紙のそれと同様に、アフマディネジャードを再選させたイラン現体制に厳しいものとなっている。

<カタール、バハレーンのメディア、選挙結果を支持>

これと対照的なのが、カタールの新聞の論調である。カタール首長家に近いアティーヤ家（副首相兼エネルギー・工業相など政府要人を輩出）のメンバーが会長に就いている主要紙「ラーヤ」は 14 日付の社説の中で、アフマディネジャードが得票率 62%で当選したことを「民主主義の婚礼」と表現し、大衆の意思を体現したものだと言っている。更に、今回の選挙は、イラン共和制の力強さ・堅固さをはっきり示すとともに、「イランの現体制に対するイラン国民の献身の深さを雄弁に物語るメッセージとなった」と、選挙結果に対して全面的に肯定的な評価を下している。

カタールのもう一つの主要紙であるワタン紙でも、コラムニストが、西側メディアがダブルスタンダードを用いてイラン大統領選挙の結果を論じていることを非難した上で、「イラン人がアフマディネジャードを支持し、約 3 分の 2 の票を投じることで彼を選んだことを認めるべきである」と主張する。

バハレーンの新聞にも、アフマディネジャードの当選を自然な結果とみなす論者のコラムがいくつか見られた。ワサト紙のコラムニスト、カーセム・フセインは、イラン国民が、過去 4 年間の保守的なアフマディネジャード政権下での経験と、それに先立つ二人の改革派ラフサンジャーニーとハータミーの計 16 年間の経験を比較して前者を選んだのだと分析した。そしてその理由として、アフマディネジャードが自らのことを謙虚で慎ましい大統領というイメージでアピールし、大衆の心を惹きつけることに成功した点を強調している。

<唐突なオマーン国王のイラン訪問発表>

カタールと同様にイランと深い関係を維持しているオマーン各紙の論調は現時点ではっきりしないものの、17 日付の各紙で唐突にカブース国王が今月 28 日からイランを訪問す

ることが報じられた。AFP 通信によると、同国王によるイラン訪問は 1979 年のイラン革命後初めてで、オマーンの Oman Daily Observer 紙によると、アフマディネジャード大統領の招待に応えたものだという。同訪問を発表したオマーン外務省高官は、オマーン国王による今次訪問は現在のイラン情勢と無関係と述べているが、アフマディネジャード大統領がいつ、どういう動機でオマーン国王を招待したのか、またイランが選挙後の混迷の最中にあるこの時期に、オマーンがこうした意外な動きを見せることは様々な憶測を呼ぶものである。

<まとめ>

アブドゥラー国王の名前でアフマディネジャードに祝電すら送らないサウジのほか、クウェイト、UAE の各紙が、イラン大統領選挙の結果に抗議するイラン国民の側に立ち、中にはイランの体制批判にまで及ぶ意見を掲載しているのと、カタール各紙の論調の違いは歴然としている。2007 年に自国で開催された GCC 首脳会合に GCC 史上初めてイラン大統領を招待するなどアフマディネジャード大統領を含むイラン指導部との間に親密な関係を築いているカタールの対イラン外交政策を反映したものと言える。

これに対してバハレーンの場合、アフマディネジャード政権に限らず歴史的に繰り返されるバハレーンの主権を見下すようなイランの態度への嫌悪感があるとはいえ、実際にイランと同じシーア派住民が多数を占めるバハレーンで、カタールと同様の論調が見られるのも当然のことと思われる。